

湘南の由来とエリアを探る

その8

海を渡って来た「湘南」-2

—勸進聖が運んだ瀟湘八景図—

和田精二

8-1 はじめに

今回も中国から禅宗文化の風によって海を渡って来た「湘南」という呼称について考えてみます。今回調べてみるのは、③ 中国同様、日本においても禅僧が詩文や絵画という禅宗独特の創作活動を積極的に行ったのか？ ④ 当時の日中間に多数の禅僧の移動があって初めて「湘南」呼称伝来説が成立するが、実際はどうだったのか、の2点です。私自身の理解度を上げるため、④ から考えてみることにしました。

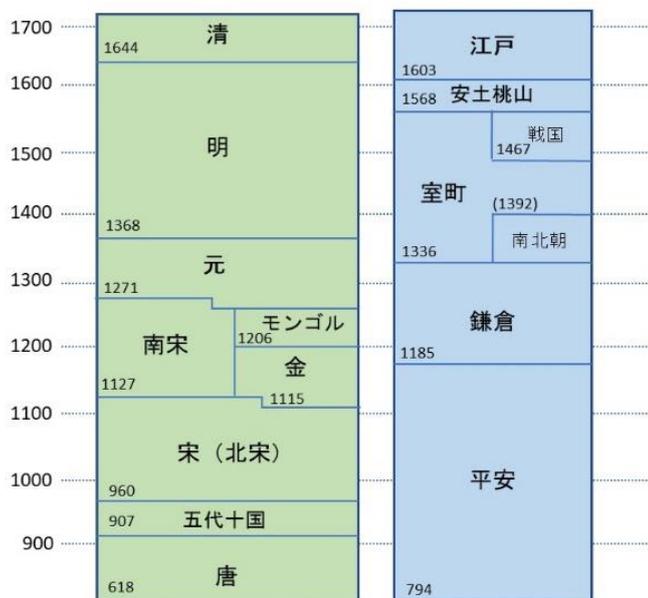


表1 「湘南の由来」を楽しむための日中比較年表 著者作表

8-2 中国からやって来た禅僧

日中間の禅僧の移動については、中国から来朝するケースと

中国へ渡航するケースがありますが、まずは前者について調べてみました。さて、その結果ですが、著名な僧だけでも、宋代に14名、元代に13名の僧侶が来朝していたことが分かりました。北条時頼に招かれ建長寺を開山した蘭溪道隆や北条時宗に招かれ円覚寺を開山した無学祖元がよく知られています。彼らに随侍して来た無名の僧侶を含めるとかなりの数の禅僧が来朝しています。中国の僧が大勢で日本にやって来るという現象は他宗派にはあまり例が無く、禅宗特有の現象のようです。



図1 無学祖元：建長寺・円覚寺に兼住し臨済宗に影響を与えた。南宋で元軍に包囲された時、「臨刃喝(りんじんげ)」を詠むと元軍が黙って去ったという。日本に帰化し建長寺に没す。

これだけ多くの禅僧が来朝した背景には、中国側、日本側の双方にそれなりの動機があったように思えます。宋には、北の地にあった北宋の時代と、金による北宋の滅亡後、江南に移った亡命政権が建国した南宋の時代がありましたが、元による中国統一政権が樹立されると、漢民族の僧侶として亡命せざるを得なかった動機がありました。というのは、宋代以後、10世紀頃から中国では北方騎馬民族の政治的な圧迫に対して、漢民族の伝統を守ろうという文明の国粋主義がおき、禅宗もまた、その一翼を支えていたからです。

一方の日本側にとっては、時の政権である鎌倉幕府として、平安時代以来の大勢力である公家社会や旧仏教勢力に対抗する宗教的な権威を守るために禅宗を積極的に受け入れ、利用しようとした強い動機がありました。書物では足りず、やはりそこに指導してくれる意志の強い人が必要だったようです。

8-3 中国を目指した禅僧

さて、今度は日本から中国へ渡った禅僧について調べてみました。日本から中国へ渡り帰国した僧侶は、分かっているだけ

でも、北宋時代に 20 余名、南宋時代に 100 余名、元代に 220 名以上、明代に 100 名以上という具合に、来朝した中国の禅僧とは桁違いの数です。1 度に 10 名以上の禅僧が同じ船に乗ったこともありましたが、これだけの数の禅僧が中国を目指して渡航したとは何とも驚きです。

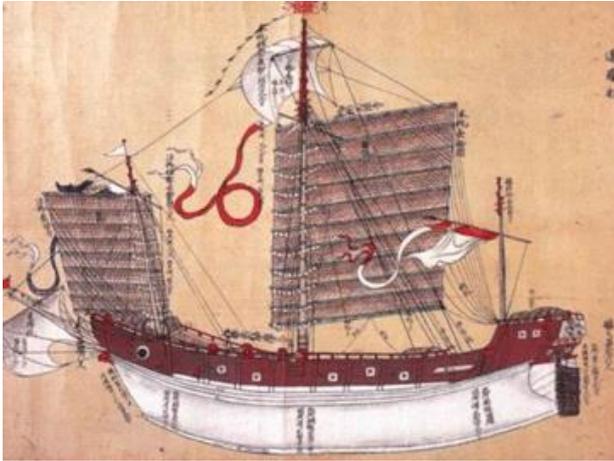


図 2 第 1 回の遣唐使派遣（630 年）に使用された船

遣隋使、遣唐使の時代よりも船体構造の進歩などで航海の安全が保障されたとはいえ、これほど多くの禅僧が中国へ向かったという事実に彼らの意思の強みの強さを感じます。ただし、全員が求法のために渡航した訳ではなく、禅の本場に行って箔付けして帰って来るといった打算的な僧も多かったようです。今も昔も変わりませんね。



図 3 栄西を扱った特集誌 別冊太陽（2014.3.1 創刊）

昔から中国文明を学ぶことに急であった日本は、中国を純粹視し極度に理想化する傾向をもっていましたが、この時期はそれが特に顕著になったといえます。13 世紀の始めに日本に禅を伝えた道元（曹洞宗の開祖）の曹洞禅はその典型といわれて

います。道元は焼き物の陶工を伴って帰朝しましたが、もう 1 人の禅僧 栄西（臨済宗の開祖）は茶の作法や建築技術を持ち帰ったことでも知られています。仏教だけでなく、中世と近世中国の文物や技術を伴って帰国したことに、多宗派とは違った禅宗の大きな特異性があります。その後の禅宗が日本文化に与えた影響は、衣・食・住を中心とした日常の生活文化の上で、唐代仏教のそれを大きく凌駕する強烈なものでありました。

8-4 国際貿易にはげんだ禅僧

宋という国は、科挙の制度を本格化したことや文治主義をとったことで知られています。特に文化国家として学問を奨め、文学・芸術を盛んにし、仏教・道教を保護する一方で産業の発達にも力を入れ、工業技術の著しい進歩を促しました。肥沃な江南地方では農業生産が進み商業も栄えましたが、海外との貿易が積極的に行われたことでも知られています。10 世紀以降、日本との間で遣唐使のような国家間の交流は無くなりますが、民間の交流は以前より活発化し、宋からきわめて多くの商船が日本列島に来航しています。

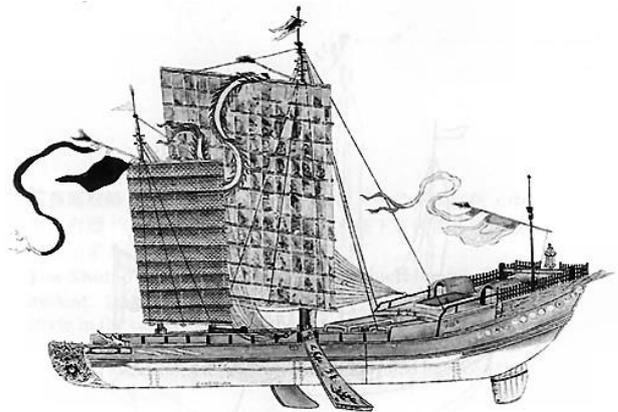


図 4 寺社造営料唐船：14C 前半に主要な寺社の造営費用獲得のため幕府認可の下、元に対して派遣された唐船。建長寺船、天龍寺船などが知られている。

興味深いのは、鎌倉仏教といわれた浄土教、時宗、律宗等の僧だけでなく禅宗の僧侶までが日本と中国の間を唐船に乗って金融や商業を目的に往来していた事実です。意外に思われるかも知れませんが、もともと古代から商業や金融にたずさわる人々に僧侶が多かったのです。

ここでピンと来るのは、8-3 で大勢の禅僧が中国へ渡ったと書きましたが、全員が求法のためではなく、商業的な目的で渡航した禅僧がいてもおかしくないということです。宋から膨大

な量の唐物と一緒に水墨画や茶道、築庭の資料などが日本に持ち込まれていますが、個人レベルで持ち帰ったと考えるのはかなり不自然です。実際にはもっとダイナミックな物流があったと考えるべきです。遣唐使は皇帝に朝貢品を献上し返礼品を受け取る政治的儀礼が目的でしたが、もっと重要な目的は唐の先進文物の獲得で、奢侈品、書籍、仏典、楽器、武器、工芸品の買い付けにありました。そこで！ というのもなんですが、禅文化流入の一端を勸進聖が担っていたと考えるのが妥当に思えるのです。

8-5 海を渡った勸進聖（ひじり）

唐船を使った僧侶の国際的な商業活動事例として「勸進聖（ひじり）」に注目してみたいと思います。「勸進」と聞くと、歌舞伎における弁慶の勸進帳を思い浮かべますが、勸進とは、寺院の建立や修繕のために、信者や有志者を説き、その費用を奉納させることをいいます。

奈良時代の行基、平安時代の空也、平氏に焼き討ちされた東大寺の再建に歩いた重源などが勸進聖としてよく知られています。国内では、勸進を推進するために水上交通の要所を巡る船（勸進船）に勸進聖を乗せ、船内で説法などを行わせて寄付を募ることが行われていました。唐船の場合はどのような目的で勸進が行われていたのでしょうか。



図5 弁慶の勸進帳：勸進と言えば歌舞伎の勸進帳！勸進帳とは勸進の目的が書かれた巻物形式の趣意書。写真は7代目松本幸四郎の弁慶。富樫に勸進帳を読み上げる様に問われる場面（勸進帳読み上げ）

それを説明するために、禅僧同様、鎌倉時代に北条氏に密着した律僧が勸進聖として活動した事例をあげてみます。彼らの活動が最も盛んだった時、律僧は寺社の造営、橋の架設、港湾の修築など公共的な大土木工事の資金調達の名目で、関所を津（船着き場）や泊（湊・港）にたて、神仏のための寄付として交通税を徴収する勸進聖の役割を担っていました。

さらに彼らは唐船を建造し、北条氏の関係者の貨物などを載せて中国大陸に渡航、莫大な銅銭、青磁・白磁を輸入することで巨利を得たり、それを資本として大規模な建築工事を行っていました。土木建築に関わる工人など各職種の職能集団を組織して大事業を行った僧侶たちは、すぐれた計数能力を持ち、正確な利子計算を含む決算を行うことが出来ました。ということは、律僧は勸進によって集めたものを資本として運用する企業家であり、貿易商人であったのです。現代の商社マンのグローバルビジネスに相当する事業を行っていた訳です。

唐船が中国へ派遣されるとき、律宗等の僧侶が勸進聖として乗船しましたが、貿易という行為もそこから得られる収益を神物、仏物とすることを前提に行った訳で、基本的には神仏と結びついた事業でした。とはいえ、仏教人が商業資本や金融資本を動かしていたことに違いありません。



図6 勸進大相撲：寺社の本堂や山門の造営・修復費用を捻出するために相撲を活用した勸進大相撲は戦国時代から始まった。

8-6 禅僧は中国文化のプロフェッショナル

さて、問題の禅僧です。上述した唐船に乗って中国へ渡り、勸進聖を行う行為は律僧に負けず劣らず禅僧も活発に行っていたといいますが、具体的な活動実態は今回の調査では分かりませんでした。しかし、個人レベルで日本に運び込んだと考えることには無理が大きすぎます。むしろ、膨大な量の唐物と一緒に「水墨画」や茶道、築庭の資料などの中国文化品を勸進と

して持ち帰ったと考える方が妥当です。留学僧が復路の任務を勸進聖として全うさせたとも考えられます。そのように考えないと禅宗が日本文化に与えた影響を理解することは不可能です。そうなると、他の宗派に見られないこうした活動の源泉はどこに起因しているのでしょうか。

禅僧は宗教者であると同時に中国通の文化人でもありました。禅を説きながら儒学や老荘の哲学にも通じ、宗教色のない詩文もつくる一方で、当時すでに法具や仏堂の荘厳具であることも超えて美術品化していた唐物を愛でたりもする中国文化に精通したプロフェッショナルでもありました。禅宗が足利将軍の宗教的・文化的バックボーンとなったことによって権力者との密着度が増し、将軍・武家の宗教・文化コンサルタントとして、また遣明使では外交・貿易の交渉を担うなど、その活動の範囲は実に多彩だったといえます。そうした背景があれば、唐物に異常なまでの興味を示した将軍や武家の求めに応じ、中国から勸進のルートで美術・工芸品を大量に輸入する禅僧間のネットワークがあったことが想像されます。

8-7 勸進聖が運んだ「瀟湘八景図」



図2 牧谿 煙寺晚鐘図



図3 牧谿 漁村夕照図



図4 牧谿 平沙落雁図



図5 牧谿 遠浦帰帆図

図7「湘南の由来とエリアを探る・その6」に掲載した牧谿の作品

「瀟湘八景図」の内の4景。

中国からの禅文化の流入を考えると、栄西が運んだ茶の作法のようなソフトもありましたが、勸進聖の扱った積み荷のようなハードの方が圧倒的に多かったのです。そして、その積み荷の中に、牧谿（もっけい）や玉潤（ぎょくかん）の「瀟湘八景図」が含まれていたと推定してみることが出来そうです。すなわち「湘南」呼称の淵源が禅僧によって日本に運ばれたということなのです。

ここで、本シリーズ・その6に掲載した文章を再度引用します。以下の内容は、瀟湘湖南を描いた牧谿の「瀟湘八景図」が日本に運ばれてきた後、いかなる運命をたどったかを説明したものです。

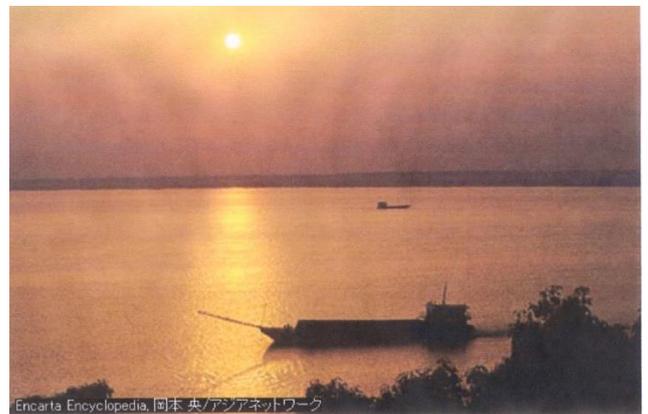


図8 瀟湘湖南と呼ばれた洞庭湖畔の夕暮れ

『今回観ることのできた牧谿と玉潤の「瀟湘八景図」は、もともとは八景をまとめて一巻に仕立てた「巻物」でしたが、足利将軍家が所蔵した段階で裁断され、東山御物の印が押され、八幅の茶会用の掛け軸に改変されてしまったようです。もうひとつ驚いたのが、それぞれの「瀟湘八景図」の伝来です。牧谿の「平沙落雁図」の場合は、足利将軍家の手元を離れた後、松永久秀、織田信長、徳川家康、紀州徳川家、加州前田家という具合に所蔵先が変わっていきました。一方の玉潤の「山市晴嵐図」も、豊後の豪商・中屋壮悦、大友宗悦、大友宗麟、豊臣秀吉、金森可重、松平治郷（不昧）という具合に持ち主が変わりました。当代1級の権力者やら豪商やら茶人の手元から手元へ掛け軸が移動した訳で、牧谿と玉潤の「瀟湘八景」が、いかに権力者たちにとって垂涎的であったかが偲ばれます。戦国時代以降、東山御物を筆頭として、いわれのある茶道具が軒並み値を上げていきましたが、牧谿や玉潤の絵画も例外ではなかったようです。』湘南の由来とエリアを探る/その6

中国から唐船に乗った禅僧によって日本にもたらされた墨蹟は、散逸して現存しないものも含めて莫大な数になりますが、引用した牧谿の「瀟湘八景図」や同じく玉潤の「瀟湘八景図」は、その中の絶品であった訳です。巻物であった牧谿の作品が裁断され、東山御物の印が押され、八幅の茶会用の掛け軸に改変され、足利将軍家の家宝になっていた経緯を考えると、彼らの作品は、禅僧によってかなり目的的に中国から唐船で運ばれたことが強く想像されます。ということは、禅僧にとってのビッグビジネスであったことが示唆され、「瀟湘八景図」が勧進として扱われたかどうかは断定できませんが、中国から日本に禅僧によって運ばれた可能性はかなり強いのではないかと思えるのです。

今回の調査の目的は、『当時の日中間に多数の禅僧の移動があって初めて「湘南」呼称伝説が成立するが、実際にどうだったのか』にありましたが、その立証よりも、勧進という形で組織的に、目的的に日本に持ち込まれた！という勝手な説づくりに力が入ってしまったようです（笑）。



■引用図表

図 1 無学祖元

<http://neko.koyama.mond.jp/?eid=360650>

図 2 第 1 回遣唐船

<http://www.buddhachannel.tv/portail/spip.php?article17637>

図 3 栄西掲載誌

http://www.rinnou.net/shop/products/detail.php?product_id=3310

図 4 寺社造営料唐船

<https://ja.wikipedia.org/wiki/File:SongJunk.jpg>

図 5 勧進帳

<https://ja.wikipedia.org/wiki/勧進帳>

図 6 勧進大相撲

http://www.sumo.or.jp/IrohaKnowledge/sumo_history/

図 8 洞庭湖の夕暮れ

<http://bunarinn.lolipop.jp/bunarinn.lolipop/tok2-index/3GharukaEncare/EncartaAAA/bunka/inasaku/inasaku.html>

■引用文献

- ・禅からみた日本中世の文化と社会 天野文雄監修 ぺりかん社 2016
 - 日本中世禅林における杜詩受容 太田亨
 - 禅林墨蹟の二面性 野口善敬
- ・海民と日本社会 網野善彦 新人物往来社 1998
- ・日本の歴史をよみなおす(全) 網野善彦 筑摩書房 2017
- ・日本文化史講義 大隈和雄 吉川弘文館 2017
- ・日中を結んだ仏教僧 頼富本宏 農山漁村文化協会 2009
- ・禅と日本文化 柳田聖山 講談社学術文庫 1985
- ・「海国」日本の歴史 宮崎正勝 原書房 2016
- ・うしろうに見る小田原 深野彰 新評論 2016
- ・別冊太陽・禅宗入門 竹貴元勝 平凡社 2016